

カトリック 仙台教区報

2009年1月4日 No.185

発行

カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

2009年 年頭司教書簡 殉教者に学び「信仰共同体」を作ろう

仙台司教 マルチノ 平賀徹夫

仙台教区の皆様、神の独り子がわたしと同じ人間となられたから2009年目の年が明けました。年頭にあたり、神様の豊かな祝福を願いながら、皆様からのご挨拶を申し上げます。

昨年11月24日の長崎での「ベトロ岐部と187殉教者列福式」の盛大な式典は、わたしたち仙台教区の信者にも深い感動をもたらすものでした。わたしたちは殉教者たちを信仰の尊い先達として記念しながら、彼らが世界のカトリック教会の中で公に「福者」と宣言されたことを、誇りを持って喜び合いました。今年は、あの誇りと喜びの意味を深く味わいながら、毎日の生活の中で信仰を証ししていく年であります。

仙台教区では教区宣教司牧評議会主催で活性化のための研修会を毎年開催してきました。今年度の研修のテーマは「小教区共同体作り」ですが、「信仰共同体」の良いモデルとして、400年前の教会の「組」のありようを挙げることができると思います。厳しい迫害の時代、信者たちは「組」

を作り、その温かな交わり・固いきずなの中で、共に祈り、共に学び、仕え合い、そしてどのような人をも大切にして生きることを通して、信仰を証ししたのでした。今年は殉教者たちの信仰に倣



司教団と共に列福式に入場する平賀司教

が作られるほどに、聖体への思いを中心とする姿がありました。わたしたちも祈りを大切にしますが、特に、聖体として共にいてくださる主のお心を思い、そのみ前で（共同体と共に、教会のために、世界のために）祈ることを心がけてみましょう。

②共に学ぶ：教会は今、パウロ年を過ごしています。主イエス・キリストを知るために福音書を読み、またキリストの心を伝えるパウロの思いを学ぶために、共に聖書に親しむ機会を増やすことも心がけたいと思います。11歳のデイエゴ林田は、十字架を担うイエスの様子を知っており、「イエスさまはカルバリオに歩いて行きました」と言って、自分も処刑地まで進んで歩いて行つたということ

①聖体訪問：殉教者たちの生き方の源泉にはいつも祈りがありました。しかし、信仰生活で次のような点を意識してはいかががでしょうか。教会学校の子どもたちや青年たちも含め、皆様に呼びかけたいと思います。

③仕えること・慈悲の行い：一つは唯一の神をすべてにまさって礼拝すること。次は自分のようにポロシモ（隣人）を大切にすること（『どちりなきりしたん』第7章）が教会の使命、信仰生活の内容です。敵意に満ちた社会の中で、ミゼリコルディア（慈悲）の組は「慈悲の行い」を迫害者に対する答えとす

るよう努めたのでした。

④一人ひとりを大切にする：昨年12月10日、国連世界人権宣言の60周年の記念にあわせて、日本の司教団は「すべての人の人権を大切に」というメッセージを発表しました。信仰や信条、民族・国籍などに関わりなく、神の似姿である一人ひとりを大切にすることを学び、そういう社会のために働くことを心掛けたのです。共同体の中で互いに受け入れあい生かしあうために、わたしたちの思いや言葉、行いが、迷った一匹の羊を大切にするイエスの心とつながっているかどうかを感じる感覚を、また、社会の動きが一人ひとりを大切にしようとする方向のものかどうかを感じる感覚を、磨きたいと思えます。

では仙台教区の皆様、この一年も、父である神と主キリストへの賛美と感謝のうちに、そして聖霊の導きへの信頼も新たに、希望と喜びをもって愛のうちに歩む一年となりますように。新福者たちのお取り次ぎも頼みとし、主からの豊かな恵みが皆様の上に注がれますように祈りながら、祝福をお送りいたします。

2009年1月1日

列福式に向けて教皇メッセージ



11月 日(日) 正午にサンピエトロ広場で行われた「お告げの祈り」の中で、

教皇ベネディクト十六世は、1殉教者の列福に向けてメッセージを述べられた。

「明日、日本の長崎市で1名の殉教者の列福が行われます。1名は全員、1世紀初頭に殺された日本人の男女です。日出づる国のカトリックの共同体とすべての国民にとってきわめて重要なこの機会にあたって、わたしはこの人々に霊的に寄り添うことを約

束します。また、日本のわたしたちの兄弟姉妹とともに前もって喜ぼうではありませんか。この兄弟姉妹たちは明日、長崎で、尊崇すべき神のしもべ、ペトロ岐部カスイと1同志殉教者の列福式を行うからです。キリストに結ばれたこの殉教者たちの罪と死に対する勝利が、わたしたち皆を希望と勇気で満たしてくれましますように」。

ペトロ岐部と187

殉教者列福に寄せて

日本カトリック司教協議会会長

ペトロ 岡田 武夫 大司教

このたび長崎で史上初めて、ペ

トロ岐部と187殉教者の列福式が行われます。これは極めて意義深いことであり、この機会に日本に新しい神の息吹が吹き、日本の福音化が進展することを切に望み、神の恵みを切に祈ります。日本は殉教者の国であり、日本26聖人殉教者をはじめとする多くの殉教者の聖人・福者が与えられました。しかし、今回は日本の教会の主導による、日本の教会のための列福運動による実りです。しかも188人全員が日本人で、その中の183人が信徒です。ここに今回の列福の特色があります。

殉教者の生き方から、今日の教会として学ぶべき点が多々あると思います。現代は価値の多元化と相対主義の時代といつてよいのではないのでしょうか。人々は信ずべき明確な軸足を失っています。課題は、いかに他者を否定せず、排撃せずに自分の信仰と信念を貫くか、ということだと思います。殉教者の信仰告白は明瞭明確であります。現代は人間の絆が弱く、そして薄い時代です。課題は、いかに互いの自由と意思を尊重しながら、他者を自分より優れたもの、かけがえのないものと考えて大切にかかわっていくのか、ということだと思います。

塩と光

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなくユダヤとサマリア全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(使徒1・8)。キリスト者としての

の召命は、イエスの死と復活の証人になることです。▼ギリシア語のマルテュスは、証人と殉教者をも意味します。信仰を証しすることとは、本来的に命をかけることなのです。従って、迫害がある時代に生きるときは、殉教者になりますし、平和な時代には、証聖者になるのです。▼「真実であって本来の意味でのキリスト教的な生活のあかしこそ、福音化の最初の方策となるべき」と、教皇パウロ六世は主張します『現代世界の福音化』。ミサの終わりに、福音を宣べ伝えるために派遣されます。命がけでイエスの死と復活を証しするためです。▼福者テクラは、いとしい五人の子どもたちと共に炎の中で信仰を、見事に証しました。「もうすぐ何もかもはつきりと見えて、皆会えるから」と、子どもたちを励ましながら。

(博)

日韓司教交流会

司教 マルチノ平賀徹夫

毎年、日韓司教交流会が開催されています。



アジアの中の隣国である日本と韓国の司教たちが顔を合わせ、その度ばれるテーマについて研修を行いながら交流を深めるものです。時期は11月ころ、開催地は日韓交互にということになっていて、2008年は11月11日からの2泊3日、メインテーマは移住移動者の司牧、プサンの西隣に位置する山(マサン)教区の、新しく立派にできたばかりのカトリック教育館が会場でした。第14回の開催で、司教になって3年目のわたしにとっては3回目、2度目の韓国訪問でした。日本からの司教は14人、韓国からは16人でしたが、仙台教区で働いてくださっているユン神父様の教区・大田(テジン)教区のユン司教様はご参加がなく、お目にかかれずじまいで残念でした。

前回も感じましたが、韓国のカトリック教会の勢いは的だというです。信者数は日本の10ほどもあるようです。休日に策しながら原(スウ)教区・教区長の(リ)司教様と話しますと、スウ教区は韓国ではソウルに次いで大きい教区で信者数は70万人ほどとか。仙台教区のことをられ、仕方がないので1万1千人と答えると、スオンでは1万5千人ぐらゐの小教区があると言われてしまい、ウン、やっぱり数は力かな。

のハッピーアワはアルコールなど頂きながらの談話の時間。同じテーマにマサン教区の今は退された(パク)司教様がおられ、わたしが仙台教区だと自我介绍すると「あ、仙台。

神父様はお元気でいらっしゃいますか」と日本語で話しかけられました。(仙台に帰ってから神父様に話すと、わたしがそのお名前を言う前に、「あ、パク司教さん」と来ました。)

回を重ねるごとに覚える顔とお名前が増えていきます。同じ極東に生き、同じ使命にあずかっている者として交わりを深めて行きたいと思います。11月24日、長崎での188殉教者列福式には韓国から8人の司教様方が参列されました。その中にはマサンのパク司教様もおられました。

殉教者は非暴力を貫きました。現代は個の存在が薄く、自分の存在の意味に疑問を持つ人が少なくありません。現代の「荒れ野」において、人生の孤独と意味の喪失に苦しむ人々に癒しと励まし、光と力となるネットワークを築くことこそ、教会の重要な課題であると思います。400年前日本には司祭不在の共同体が立派に存在していました。

現代、これらの課題を乗り越えるために、188殉教者の生き方は大きな力、支え、導きとなる信じます。

二本松教会創立50周年と 第18回殉教記念行事を終えて

二本松教会 橋本一子

二本松教会は、町全体がお寺と坂の多い町で秋には提灯行列でにぎわう城下町にあります。

このような土地柄に1958年(昭和33年)にドミニコ会宣教師フォルジェト神父により教会が創立されました。同年8月10日小林有方司教司式で献堂式が行われました。

11月3日(月・文化の日)、創立50周年記念式典と第18回二本松クリシタン殉教祭を挙行いたしました。

東京からドミニコ会管区長田中信明神父様をお迎えし、県内外から80余名の方々が参加され、50年の歩みを感じ、小さな教会は喜



びにあふれました。

田中神父は、祝辞で「教会の50年はまだ若い」といわれました。そうかも知れませんが、古材を生かして教会を建てたこと、ビール瓶の破片で板を削り、塗料で衣服も顔もペンキだらけにして建築を手伝ったことなどは今も語り継がれています。待ちに待った喜びの教会でした。フォルジェト神父様のジープは宣教のため休むことなく走っていました。同師は、幼稚園も開園し数々の足跡を多くの人々の心に残し天に召されました。

当時の信者さん何人かは神様のもとに旅立ち、また洗礼によって新たに生まれた兄弟姉妹たち。神の家は尽きることがありません。また、1632年(寛永8年)2月8日、クリシタン14名が二本松供中(ぐちゅう)河原で殉教されました。

神様はこの地にすでに種を蒔かれていたのです。殉教者をたたえ、神様の愛を証しすることができるように取り次ぎを願って祈りました。

この式典のため、記念誌と「祈り」と題した音楽CDを制作しました。50周年を礎にキリストに倣いつつ光の中を歩みたいと思っています。

日本188殉教者列福式と同じ時期にこのお祝が出来ましたこと、神に感謝。

大崎地域宣教司牧の歩み

古川教会50周年

明治時代(約130年前) 宣教師は徒歩で宣教司牧を行い、古川に泊しながら東北地方を回っていました。

元寺小路教会の洗礼台帳によれば、1880年(明治13年)142番に古川の受洗者の記録があります。昭和に入り邦人司祭が、仙台から通って、信徒の家々で、ミシン台を祭壇にして、ミサをささげました。

1955年、児山六七男師により、古川教会初の受洗者(洗礼名簿第1号)が誕生。

1957年10月、民家を借り、初めて司祭が常駐し、カトリック教会の看板を掲げ、洗礼者ヨハネのご保護を願い、仮教会の祝別をしました。

その後、現在地に小林有方司教が新聖堂を建設し、1963年9



月15日に献堂式が行われました。古川教会では、仮教会での宣教活動を始めてから50周年を記念して、次の事業を実施しました。

①初穂セミナー

愛の実践を考える

10月5日(日)、記念ミ

サと手作り料理での昼食会、午後から仙台ダルクを招いて「活動と現状」についての研修をしました。参加者一同、深い感銘を受けました。

②教会共同墓地設備の整備
井戸の掘削工事と、ポンプの設置、配電工事。ポンプ小屋とログハウスを設置し、墓参の時の不便を解消しました。



ログハウスと水道(井戸)



③ホームページの開設

古川教会独自のホームページ「初穂」を開設しました。ご利用ください。

告知板

◇パウロ年記念講演会のご案内◇

— パウロにとって福音とは、宣教とは何か —
講 師：鈴木信一神父(聖パウロ修道会)
日時：2009年1月25日(日)
午後2時～4時

会 場：元寺小路教会大聖堂
どなたもご自由に聴講できます。皆さまお誘い合わせのうえ、お越しくくださいますようご案内申し上げます。

(主催) 仙台中央地区教会運営委員会

http://www6.plala.or.jp/catholic/urukawa/
④50周年記念黙想会
12月7日(日) 指導 佐々木博神父 (渡辺 征子)

司教日程

1・2月

- 1・1 ① 神の母聖マリア(元寺小路)
- 9 ② 司教団社会問題研修会(大阪)
- 11 ③ 元寺小路教会
- 13 ④ 司教評議会定例会・司教団役員会
- 16 ⑤ 人権を考える委員会
- 17 ⑥ 宣教司牧評議会役員会
- 24 ⑦ 墓地委員会新年会
- 26 ⑧ 教区司教団月例会
- 29 ⑨ 学校法人理事会
- 2・2 ⑩ 那須ガリラヤの家・感謝の集い
- 8 ⑪ 古川教会堅信式
- 10 ⑫ 司教評議会役員会
- 11 ⑬ 活性化・研修会(岩手)
- 15 ⑭ 活性化・研修会(宮城)
- 16 ⑮ 臨時司教総会
- 23 ⑯ 県別司祭の集い
- 26 ⑰ 部落差別人権委・定例委員会



ペトロ岐部と187殉教者列福式 全国から3万人… 記念日は7月1日

1981年に来日した教皇ヨハネ・パウロ二世が殉教者の顕彰を呼びかけたのを受け、日本の司教協議会が列福に向け準備を始めて20数年にわたる努力が実り、ついにこの日を迎えた。

長崎市松山町のビッグNスタジアムには、フィールドいっぱいパイプ椅子が並べられ、黄色のスタツフジャンパーを着たボランティアが、笑顔で参加者たちを迎え、教区ごとに割り当てられた座席へと案内してくれた。仙台教区からの参加者は、約270人(写真①)。

朝から心配していた天候も太陽の光が差し込み、ホッと胸をなでおろした。午前11時30分、会場に備え付けられた巨大スクリーンに、列福される殉教者を紹介するビデオ映像が映し出された。

画面に見入っていると、ぼつぼつと降り出した雨は、たちまち大粒の雨となり、参加者たちは用意していたビニールコートなどを着込むのに大わらわ。定時より少し遅れて、列福式の開会を



告げる鐘の音が響き、入祭の歌「今日こそ神が造られた日」が流れた。さきほどまで降っていた雨も小降りになり十字架を先頭に、殉教者の聖遺物の顕示台(写真②)、聖書、青年たちによる「ローソクリレーミサ」のろうそく、殉教地のゆかりの土、などに続いて、祭服の上にビニールコートを着たおよそ500人に及ぶ司祭団の列(写真③)。その中には、仙台中央地区の担当司祭だったグアダルペ宣教会イグナシオ師の姿もあった。その後に、真つ赤なカズラに白いミトラをかぶった司教の列(写真④)、その中には韓国、ベトナム、フィリピン、台湾の司教も加わっている。そして、列福式の主司式を務める白柳枢機卿、教皇代理サライバ・マルティンス枢機卿(写真⑤)が続いている。

列福の儀は、ミサの中、回心の祈り、あわれみの賛歌の後に行われ、日本司教協議会会長の岡田武夫大司教が列福宣言の要請を教皇代理に対してイタリア語で行った。次に、殉教者ゆかりの9教区の司教がそれぞれ殉教者を紹介し、これを受けてマルティンス枢機卿が、教皇ベネディクト十六世の書簡を朗読し、高らかに列福を宣言した。同時に福者の肖像が除幕され(写真⑥)、188羽のハトがはなたれ、3万の参列者から大きな拍手がわきあがった。

大きな喜びと感動の中ミサはみことばの典礼へと続き、説教では白柳枢機卿は、それぞれの殉教者の生き方を紹介しながら「殉教者たちが現在の私たちに何を伝えたいのか、彼らの列福にはどんなメッセージがあるのか、一緒に考えてみましょう。殉教した家族は信仰、希望、愛で結ばれ、共通の価値観を持ち、何が起きても動ぜず、困難に遭遇すれば互いに助けあい、励ましあっていました。死よりも強い愛で結ばれた家庭は私たちの鑑です。このような家庭をつくるようにと殉教者たちは私たちに強く呼びかけていることで

教皇ベネディクト十六世の書簡(要旨)

1603年〜39年に日本各地で殉教した神のしもべ、イエズス会盛宣懐願修士ペトロ・カスイ岐部司祭と殉教者である以下の尊者を使徒的権威によって福者の列に加えませう。

(以下列福者の名前を列挙(省略))
イエス・キリストの福音を勇気をもって証したこの殉教者たちの記念日は、法令の定める場所と形式に従い、毎年7月1日に祝うことにいたします。父と子と聖霊のみ名によつてアーメン。

(次頁へ)



ペト口岐部と187殉教者列福式 福者に倣い 怖れずに 福音を証ししよう！

すべての人が大切にされ、尊敬され、人間らしくいきられる世界となるよう祈り、活動することを求めているに違いありません。さあ、皆さん、怖れずに歩み、一緒になって進みましょう、怖れるな、怖れるなと神様がそして殉教者が呼びかけています。皆さん怖れるな」と呼びかけた＝写真⑦。

このころになるとスタンドの上をおおいつくしていた黒雲もとぎれ、眩しい日差しが戻ってきたが、空を見上げると雲の動きはかなり激しい。

ミサ＝写真⑧の終盤で、列福列聖特別委員会委員長の溝部脩司教が、教皇代理と参加者への謝辞をイタリア語と日本語で述べた＝写真⑨。この中で、列福調査に尽力し、列福式を目前にして帰天した結城了悟神父(元日本二十六聖人記念館長)に「老いてなお情熱を失わなかった結城了悟神父に格別のお礼を申し上げます。彼の働きがなかったらこの列福式は出来なかったでしょう」と述べる



教皇代理の派遣の教皇祝福をもって列福式のミサが終わったのは、3時を過ぎていた。最後に歌われた聖歌「ごらんよ空の鳥」に合わせて仙台教区からの参加者は、お揃いのえんじ色のネッカチーフを振って喜びを表した＝写真⑩。

小雨、風、大雨、強い日差しと雪以外の天候が激しく入れ替わる大空の演出は、まるで殉教者たちの波乱万丈の人生を表現しているようでもあった＝写真⑪。だれしもが晴天を望む中、神は、列福式に最もふさわしい天候を与えて下さった。

(岩井 誠)

【列福式に参加して】

戸田 宏 (盛岡志家教会)

列福式に参加し、強く感動した。信仰は知識ではない、体験することである。キリストに倣い、その足跡を歩むこと。それは巡礼そのものである。自分の家庭から、隣人(社会)、教会が変わることが今求められている。人生は信仰の旅路であることを実感した。

元寺小路教会大聖堂でパブリックビューイング
インターネットで配信された列福式の映像をスクリーンに投影。約150人がそれを見ながらともに祈りをささげた。

この準備、投影に携わった元寺小路教会 今田みゆきさんは、次のような感想を述べた。

「困難な状況の中、キリストの教えを守り伝え続けた先達の信仰の深さに大変感銘を受けた。今回の列福は現代に生きる私たちに大きな課題を投げかけたと思う。召命の減少に悩む日本の教会にあつて、信徒の役割を今一度考え直さなければならぬと思った。

列福の恵みを与えてくださった神に感謝するとともに、関わったすべての方々に敬意を表したい」。



《主の招きに応えて》 聖ウルスラ修道会 ノエラ

このテーマを心にとめる時、次にとめる時、次のことばが思い浮かびます。：「主よ、まだ若かった時あなたは私に誘いをかけられた。私はそれにのりました」(エレミヤ1・7参照。預言者エレミヤは途中で何度か後悔したようですが私にはあんまりその体験がありません。

た。今思えば様々な理由を並べることが出来るのですが、結局は愛でおられる主の誘いに応えて、その主と共に歩み続ける愛の道の秘訣は親しい交わりを何よりも大切にすることだと体験しています。

「主があなたをお呼びです」(ヨハネ11・28参照。いつもそのおことばに耳を澄ましていられたらと思っています。私の深い幸せがそこにありますと知っているからです。

招きに応えて

22

もちろんいつも、いつも青空の人生ではありませんでし

主との愛の関わり、暖かい、友情のような関係を望んで、祈りもとめて、養って、強めていく心構えにつきるかもしれません。たとえば「あなたを呼ぶ、わたしの目にあなた

世力連アジア太平洋地域会議―2008

『平和を創る女性―信仰と行動に結ばれて』

日力連 副会長 阿部 正子（東仙台教会）

10月26日(日)～31日(金)、世界カトリック女性団体連盟(66国100団体)のアジア太平洋地域会議が韓国ソウルにおいて開催され、5大陸より約190名が集まった。日本からの参加は、13名。仙台から佐々木博神父と共に参加した写真II。

明洞(ミョンドン)カテドラルでの開会ミサには民族衣装であざかり聖堂は国際色に彩られた。

ミサの進行は英語と韓国語だったが、特に佐々木神父は日本語で福音を朗読した。

開会式では教皇大使はじめ来賓の紹介、韓国の歓迎挨拶に続き、カレン・ハレイ世力連会



温もりを胸に帰仙。一人ひとりから始まる「キリストの平和」を男性の方々とも協力しながら、共に次の世代へつなげていきたいと思う。



テレビ中継などでミサに参加したことになるのですか？

Q:最近、ある信者さんから、「私、このごろ、パソコンでミサにあずかっているから、教会に行かなくてもいいと思うの」と言われたのですが、本当にそうなのでしょうか。

A:技術の進歩に伴って、私たちを取り巻く周囲の状況はどんどん変わってきています。しかし、変わらないものもあります。「ミサへの参加」ということも、変わらないことの一つです。

…信者が意識的に行動的にこれに参加し、実りを得るよう留意すべきである」と書かれています。同様のことは、『ミサ典礼書の総則』の第1章にも書かれており、さらに「これは心身の参加を意味し」(3項)、「信者の出席と行動的参加は、祭儀の教会的性格をもっともよく表明するもの」(4項)とも書かれています。

このような行動的・意識的参加は、モニター画面を見ているだけでは不可能です。教会共同体の兄弟姉妹と共に、心と声を合わせ、神を賛美し、神のことに耳を傾け、応答し、ご聖体をいただくというキリストと一致するのです。コミュニケーションの極致は、「コムニオン(交わり)」だと言われますが、聖体拝領によって、私たちはこのコムニオンを生きるように召されているのです。

しかし、病床に伏しておられる方や、ご高齢のために、教会での感謝の祭儀に参加したくてもできないという方も大勢おられます。その方々が、テレビやビデオで、感謝の祭儀を見、信仰を強め、聖体奉仕者をご聖体を携えて訪問して

くださることを熱心に、信仰をもって待ち望まれるということ、は大変よいことです。



会議では、深堀冴子 日力連会長が、唯一の被爆体験国としての現状と、伯父で被爆者の永井隆博士が訴え続けた戦争放棄と平和維持のメッセージ、憲法9条について語った。また日力連が1999年来取り組んでいる「いのちを守る運動」とDV関連のネットワークについて、仙台のあけの星会の活動と仙台教区報に掲載されている事例や、国際婦人年連絡会との連携などについて報告した。「アジアにおける移住者の家族に及ぼす影響」「女性に対す

る暴力」「命と平和を尊ぶ」グループ討議でも、各国の事情のもと女性たちが神のみ旨にそって活動を続けていることを知り、大きな力をいただいた。切頭山(チョルトウサン)殉教地と北朝鮮との国境の贖罪教会巡礼、宗教の違いを超えて平和づくりに共感する尼僧(仏教)の韓国文化での手厚いおもてなしも心に残った。親切な日本語ボランティアの方々、信仰を深め合った姉妹たちとの交流などなど、主の恵みに感謝。派遣ミサでは色紙に毛筆の「愛」の文字を奉納した。

5月の日力連仙台総会に参加されたテレサ・オーアジア会長はじめ韓力連の皆さまの温かいお心遣い、また日本帝国時代を経験した方が、わたしを抱きしめてくださったときの

ありがとう保育園 金ヶ瀬カトリック保育園開園50周年

社会福祉法人カトリック児童福祉会
金ヶ瀬カトリック保育園
園長 前田よし子

大河原町金ヶ瀬地区にある当保育園は11月1日(土)、カトリック仙台教区長 平賀徹夫司教様はじめ、大河原町町長 斎 清志様並びにたくさんのご来賓と保護者の皆様に出席していただき、開園50周年のお祝いの集いを行いました。当日は、子どもたちと一緒に園舎を「ありがとうのこころ」を込めてきれいに飾ったり、作品を展示し皆様をお迎えしました。記念のつどいでは、司教様とご一緒に祈りをした後、トーンチャイムの演奏、聖歌や遊戯の披露をしてお祝いしました。



司教様から園児たちに「自分が、

人にされて嫌なことは人にしないしてもらってうれしいことは、みんなにしてあげましょう」とのお話がありました。

当保育園の歴史は、1951年(昭和26年)頃から地域の乳幼児保育の必要性が高まってきたのを受けて、大河原教会の豊田政夫神父様をはじめ、当時あった金ヶ瀬教会の細淵この多様が献身的にお力を注がれ、無認可の保育園を誕生させたことから始まります。1958年(昭和33年)に認可保育園となつて現在に至っております。これらの歩みを記念誌「みこころ」にまとめて皆様にお配りしました。

開園50周年を迎えられたことは、カトリック仙台司教区の皆様、行政や地域の皆様、元職員の皆様のお働き、ご支援があつたことと深く感謝すると共に、保育園の伝統を守ることの責任の重さと、喜びをかみしめております。

乳幼児を取り巻く環境は著しく変化しておりますが、神様のお恵みをいただきながら、「愛・心・笑顔・感謝」を大切にされた保育の実践と、地域にますます貢献し愛される保育園運営に努めてまいりたいと思っております。神に感謝。

人権を考える委員会から

委員長 園部 英俊

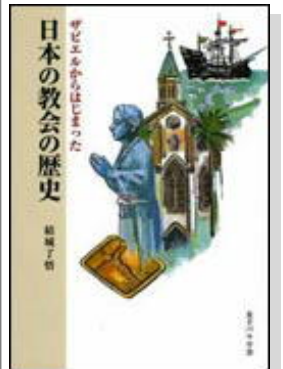
ハンセン病患者強制隔離政策によつて生み出された差別・偏見は、高齢化した多くの回復者とその家族などに今なお癒されない深い苦しみを与えております。

現在、人権を考える委員会では、一昨年のシンポジウム記録集をあらためて読み直しながら、その内容についての意見交換を行つております。各小教区におきましても、この記録集を活用しての学習会など独自の取組みが行われるよう期待しております。なお、関係団体などから寄贈された著書や、中高校生向けのDVDなどが若干ございますので、ご希望がありましたら教区事務局までお知らせください。電話 022-22217371

仙台教区外国人ヘルプデスクのご案内

ドメスティックバイオレンス、就労問題、出入国管理に関することなど生活上のさまざまな困難を抱える外国籍信徒の相談に英語、スペイン語、韓国語、ポルトガル語などで対応します。
(月曜日〜土曜日、午前9時〜午後6時)

電話 080-1855-5149
FAX 022-22217378



第31回聖霊による刷新東北大会

10月24日(金)〜26日(日)、茂庭荘(仙台市)で開催された。講師の横浜教区浅田教会のエドワード・ブジョストフスキー師は、「聖霊の力を受けてキリストの証し人になろう」と題して、毎日、一定の祈りの時間を持つこと

の大切さ、自分の思い行いが、「自分のわがままか? 聖霊によるものなのか?」の識別を怠つてはならないことを強調された。日々の生活の中で祈りのうちに聖霊を願ひ求めることの大切さを実感させられた。

2日目には、司教総代理佐藤守也師、飯野耕太郎師(秋田土崎教会)、ラシヤペル師(塩釜教会)と共にミサをささげた。

今大会では音楽奉仕にポーカールの方が加わり、美しい歌声に導かれ、豊かな聖霊の恵みを祈りつつ閉会した。

佐藤直美(元寺小路教会)

新刊案内

『ザビエルからはじまった 日本の教会の歴史』

著者 結城 了悟/発行 女子パウロ会/定価 1300円十税

長崎で「ペトロ岐部」と1877殉教者」の列福式が行われ、仙台教区からも多くの方々に参加されましたが、本書の著者は、おしくも列福式を待たずに亡くなられました。著者はこの列福のために尽力なさつた神父様として、また長年「日本26聖人記念館」館長を務められたキリスト教研究者として有名なイエズス会の司祭です。ザビエルとヤジロウの出会いから始まつた日本の教会の歴史を、人と人との出会いを軸に書かれたユニークな歴史です。ザビエルがキリスト教を日本に初めて伝え、日本人は初めてイエス・キリストを知りました。さらに、西洋文明と日本が出会うことにもなりました。

この出会いの歴史が、59の項目に分けて語られ、ところどころに入れられた挿絵が本書を読みやすくしています。本書は単なるキリスト教史だけではなく、1981年2月の教皇ヨハネ・パウロ2世の来日までが述べられています。一項目ずつが簡潔にわかりやすく語られています。本書を読みながら、ここに描かれている人と人との出会い、文化と文化の出会いを超えて、読者が神との出会いに導かれるのを感じることでしよう。



仙台教区 2007年度 決算概要 -その2-

今回は、仙台教区で宣教司牧に携わって頂いている司祭の生活面が、なにで支えられているかにスポットを当てて報告いたします。

司祭はそれぞれが所属する団体（教区、外国宣教会、修道会）によって、司祭給として受け取る金額や支給内容が異なっています。外国宣教会、修道会に所属している司祭はその団体の規則に基づいて支給されています。

仙台教区司祭団に所属する司祭（当教区内の邦人司祭の大半の方々）は、

1. 幼稚園園長等を兼務し、園長給与を受けている方々はその収入による（但し、司祭団会計規則の給与基準を超えた部分は寄付金として教区司祭団会計へ寄付することとなっている・・・後述）。
2. それ以外の司祭へは「司祭団会計」より司祭給が支払われます。

更に、現役を退かれた方々へは「高齢司祭厚生福祉基金」より支給されております。

以下、「教区司祭団会計」と「高齢司祭厚生福祉基金会計」の決算について概況を報告いたします。

○ 教区司祭団会計収支 2007.4. 1 ～ 2008.3. 31 (単位 千円)

収入の部		支出の部	
1. 負担金収入	46,530	1. 活動研究費	2,503
司祭給負担金	(39,698)	黙想会	(1,117)
2. 寄付金収入	25,684	2. 運営費	52,009
差額納入金	(18,583)	①人件費	(49,562)
寄付金	(7,101)	司祭給	《 37,922
3. その他収入	333	職員給	《 6,645
4. 財務収入	1,722	②事務費	(2,447)
		3. 他会計繰入支出	3,000
		4. その他	519
		5. 財務支出	2,361
合 計	74,269	合 計	60,392

「教区司祭団会計」は仙台司教区に所属する、主に邦人司祭の活動および生活面を維持する為の会計です。

本来は、仙台司教区に配置されている全司祭の生活面を教区が負担すべきはずですが、残念ながら現状では13名の司祭給を負担するのが限度です。外国宣教会・修道会司祭への給与は所属する宣教会・修道会及びその小教区の信徒に負担して頂いています。

「収入の部」

1. 最も大きいのは各小教区教会が負担している「司祭給負担金」です。
2. 次に大きいのは「差額納入金」です。これは、幼稚園長として幼稚園から受け取っている給与が「教区司祭団」の規定の給与額を超えた部分を「差額納入金」としてこの会計に納入するものです。当然この場合は「教区司祭団会計」から司祭給与は支給されません。
3. 次に「寄付金」です。これは外部からの寄付金ではな

く、司祭が受給した年金の一部です。

司教および教区司祭が受給した年金は以下のようにそれぞれの会計に寄付されることになっています。

- 司教および本部付司祭の年金⇒教区本部会計と高齢司祭厚生福祉基金会計へ半々に
- 現役司祭が受給した年金⇒教区司祭団会計と高齢司祭厚生福祉基金会計へ半々に
- 現役を退かれた司祭が受給した年金⇒高齢司祭厚生福祉基金会計へ全額

「支出の部」

1. 活動研究費は、司教・司祭が一堂に会して、宣教司牧、情報等の交換を図る月一回の「月例会」や「黙想会」等の開催費用です。
2. 運営費は大半が 司祭給与 ですが、4名の職員給与と全体の法定福利費も含まれています。
3. 高齢司祭厚生福祉基金会計へ年3百万円の補助をおこなっています。

○ 高齢司祭厚生福祉基金会計収支 2007.4. 1～2008.3. 31 (単位 千円)

収入の部		支出の部	
1. 教区司祭 拠出金	828	1. 給付金	5,667
2. 寄付金	33,705	2. 負担金(職員給 与分)	3,000
3. 司祭団会計 より	3,000	3. 司祭の家 経費他	2,074
4. その他	541		
合 計	38,074	合 計	10,741

「高齢司祭厚生福祉基金会計」は高齢司祭の病気、災害等の医療費、日常生活の扶助を図ることを目的とした会計であります。昭和51年に創設され、平成10年3月まで 特別献金をお願いし基金をつくりました。

その後の原資は

- ①教区司祭団の司祭より一人毎月3千円が拠出されます。(当年度は 82万円)
- ②教区司祭団会計より司祭給を受けている司祭で、年金受給している現役司祭の年金受給額の半分が「受給年金拠出金」として拠出されます。(722万円)
- ③幼稚園園長等を兼任していた司祭が転任した際受け取った「退職金」も全額拠出されます。(225万円)
- ④物故司祭の遺贈金や個人寄付金。(2422万円)となっています。②～④は寄付金として計上されます。

当年度は ④が多額となって収入が大きくなりました。納付金は今年度7名の引退司祭に支出されました。

(会計補佐 小守林新策)